

有つ。たしかに文章に関する総合辞典たり得ているのである。多少の過不足はあるにしても、その新味ある、かつ視量ひろい編集態度は高く評価したい。ちかごろの文章に対する意識の低下にはほとんど目をおおおうほどのものがある。活字になつた「論文」のたぐいにも「主語と述語」の關係があまりしなかったり、「てにをは」を無視した行文が見られたりする。ひとり合点のものが少なくはない。やはりいくぶん野暮ったいくらいの注意が文章の表現に關しては心がけられてしかるべきなのだ。このごろは辞典類の出版もブームにあるようだが、この『文章表現辞典』などは如上の意味からもひととおりの便宜的使用に終わってはならぬものである。使いこんでみる必要があり、そしてその値うちもありそうない冊である。終わりに無いものねだりのようではあるが、なお一つ大まかな感想を添えると、この種の辞典はもつと行儀のわるいものであつてもよいのではないか、たとえば、清水幾太郎氏編の『現代思想事典』（講談社現代新書24）のような文章辞典もあつてよいのではないか、と考へる。

（昭和四十年七月・東京堂刊、B5判五七〇頁・九百八十円）

井上宗雄著

## 『中世歌壇史の研究 南北朝期』

久保田 淳

中世和歌の研究に従事する者には、常に相反する二つの意識が働くのではないだろうか。その一つは、歌論をも含め中世和歌の研究は、中世文学を中世文学たらしめているいわゆる「中世的なもの」を把握するための、最上とまではいわないにせよ、少くとも捷徑の一つであるという確信に近いものと、今一つは、それとは裏はらに、複雑な様相を極める中世文学の現実、中世和歌のみを追い求めている限り遂には把握し難いのではないかという懷疑とである。私人の勝手な見通しを述べることが許されれば、少くとも連歌論や能楽論を流れる芸術観と、中古・中世を通じて育まれてきた歌論とには、重なり合う点が極めて多く、前者は後者に負う所が多大であると考え、屢々取り立てて賞揚される徒然草の美論にしても、和歌の世界で育成されてきた美意識によつてその大部分を説明できるのではないかとさえ思ふのである。そのように考えると、中世和歌の研究はなかなか意義の大きなものであると思われてくる。しかし又、軍記や説話・仏教文学の世界に目を転ずる時、これらの多くはその芸術意識の埒外にあるものだということを感じざるを得ない。

これは結局、中世和歌が徐々に変質はしつつも、遂に貴族の文学・宮廷の詩という性格を捨てなかつたことによるのであろう。

政治的經濟的實権は喪失しても、中世の貴族達に文化的指導者の地位を他者に完全に譲り渡すことはまず無かつたから、その芸術理論をもつて中世文学の大部分を説明できることは当然である。しかし又、その理論が深く武士社会や僧侶社会に根ざした文学的所産にまで適応されないことも、同様に当然なのである。

しかしながら、中世和歌が貴族の文学・宮廷の詩であつたという時、それがどの程度であつたか、具体的にいへば、どのような仕組みによつてあのような夥しい作品が産み出され、それがどのように享受されていたのか……こういつた疑問は当然起らざるを得ない。そしてそのような疑問を放置したまま抽象論を展開させることは、議論を空廻りさせる危険を伴うであらう。これらの疑問の闡明こそはまず試みられねばならない。ところで、この課題は必然的に歴史的、特に文化史的な態度と方法をもつて当ることを要求する。それは口にするのはた易いが、行なうに難いことであるから、従来とても皆無ではなかつたものの、その成果は寥々たるものであつた。ここに、井上宗雄氏の『中世歌壇史の研究 南北朝期』によつて、前著『中世歌壇史の研究 室町前期』と共にその疑問に対する一つの回答が世に出たことは、私も後学の徒にとつて、旱天の慈雨にも等しいのはもとより、中世文学研究に関心を寄せる者の一致した慶びであらう。

本書は「はしがき」に述べられてるように、弘安十年から明徳三年までの約一世紀にわたる歌壇の流れを四編十章に分けて叙述したものである。四編とは、「鎌倉末期の歌壇」を第一編に、又、南北朝を初・中・末の三期に分つて三編に宛てた結果であ

り、十章とは「正応・永仁期の歌壇」等、代表的年号によつて命名された十の小時期に基くものである。この本論の前には、前史を兼ねて序章が、又終りには纏めの意味で終章が設けられている。巻末には付録として「冷泉為相・為秀略年譜」を掲げてある。これに人名、書名・一般事項、和歌の三部に分つた索引を添えて、八九六ページに上る大冊である。

「はしがき」に、「資料に即して述べる事を原則とし、典拠はその場でいちいち記すようにした」といわれる通り、全篇豊富な資料を駆使して記述がなされている。特に殆どの章が歌書の書写・編著の節を設けて、詳しく和歌関係の古典の書写・編著を纏めて紹介しているのは、本書の一大特色であらう。研究論文の紹介も遺漏が無いかと思われるほど行き届いている。本書の新見・創見は、伊地知鐵男先生のユーモアの内に慈愛の籠る序文で誠に適確に述べられているので、改めて贅言を要しないほどであるが、幾つかを申し述べれば、二条家内の対立をこれほど克明に説かれた(第四・七・八章)のはおそらく著者が最初であらうし、静嘉堂文庫蔵詞名寄を始めとする名所歌集の解説・検討(第四章)も貴重である。又、為道・為相と宴曲の関わり(五二・一三五ページ)や、菟玖波集作者の顔ぶれについての考察(五四五ページ)も、著者の関心が広く中世文学全体に行き渡つていることを思わせて、改めて敬服される。兼好の伝記は、著者や樋口芳麻呂氏の玄惠追悼詩歌や為世十三回忌歌等に関する研究によつて判つてきた点が少くない。更に具体的には、明題和歌全集・類題和歌集の如き類題歌集をも使つて、弘安百首・徳治百首・伏見院三

十首のような歌佚定歌の復原を試み、それに基いて歌人の動向を論ぜられていることは、著者の危な気の無い方法をよく示すものである。弘安百首については、嘗て私もひそかにほぼ同様な方法で佚文集成稿の如きものを作製したことがあるが、本書によつて氏の博搜ぶりを垣間見て、自らの至らなさを痛感し、同時にその勞多きことを推察できたことであつた。文保百首の完本の紹介とその解説(第四章)も詳細である。異本扶桑拾葉集等所収の新浜木綿和歌集序(三〇一ページ)や竹柏園旧藏本耕雲千首付載の長文の消息(七一三ページ)に至つては、全文が翻刻されている。彰考館文庫本二十一代集作者大臣考に合綴の一万首作者と称する歌書の紹介(第八章)も珍しい。すべて、「資料はなるべく切り捨てず掲出する事にした」という本書の方針に則してのことである。これは、私ども同じ又はそれに近い分野を専攻する者達にとつては、有難いことである。伊地知先生が序文でいみじくもいわれる如く、本書を「和歌事典」として検索することによつて、著者が孜孜として積み上げられた成果を、私どもは居ながらにして利用することができるからである。

ただ、中世歌壇史の研究という文学史の一部門の研究書としては、時に叙述が多岐にわたるために(それは一に著者の博識・資料の博搜と、対象とされる時代の複雑多様さによるものでもあるが)、一貫した流れが中断され全体の見通しをつけにくいという感じを受ける読者もあるのではないだろうか。本書が対象とする読者は、直接にはまず著者と同じ和歌文学専攻者であろうことは疑いないが、しかし、このような内容を持ち、このような編年史

的方法で叙されている著述は、更に広く中世文学史、中世文化史に関心を寄せる人々を読者として思い描くことが当然であると思われる。その際には、それらの人々のためにも、或る程度叙述を刈り込んで説く用意があつても、よかつたのではないだろうか。程度差こそあれ、文学現象というものは恐らくいつの時代においても複雑多様な様相を呈しているのが常であろう。複雑なら複雑なりに、それらの諸現象の下に底流するものを大きく捉え直して提示することも、研究者の任務の一つではないだろうか。本質を洞察する目に誤まりが無ければ、そのこと自体は決して主観的、恣意的な解釈ということにはならない筈であるし、又、混乱した諸現象をそのまま提示することのみが客観的な方法というのではないと考えるのである。具体的には、各章の末尾にその期に

没した歌人が列挙されているが、これなどは為相・為秀の年譜に止まらず、詳しい年表でも付載して頂けば、それに讀つてもよかつたであろうし、著者が恐らく最も力を入れたであろう歌書の書写等の事実の紹介も、同様にかなり多くを年表に盛り込むことができたであろう。撰集について行なわれている詞書・作者名等の異同の表示も、注のような形で処理してもよかつたのではないだろうか。それらによつて本書の叙述は一層広い範囲の人々にも親しみ易く、すつきりとしたものになつたのではないかと愚考する。これは前にも述べたように、広い読者を想定しての謂いであつて、著者と専攻を同じくする私どもにとつては、本書のような体裁が恩恵に浴し易く、便利でもあることを繰り返しておく。

が、望蜀の言を述べる事が許されるならば、著者が歌壇史の

研究という立場を堅持して、文学批評に深く立ち入ることを回避されるように見受けられるのは、やはりいささか残念である。風雅集の歌風について、次田香澄博士の説を要約されて、それを肯定した上で作品を引用され、そのトリヴィアリズムへ陥る傾向とマナリズム化する危険性を指摘される（四六〇ページ——引用されている作品について考えるに、これも又首肯すべき鋭い指摘である）著者には、作品批評の用意があるに違いないのであるが本、書ではそれ以上を伺うことができない。竹向が記についても、塚本康彦氏の所説を引かれたに止められたが、著者御自身の見解を伺えたらと思うのである。

生来懶惰で出無精な私は、本書によつて教えられることばかりである。「あとがき」で資料の見落しをいわれる著者に、その点でお応えすることは何もできない。それ故、ほんの参考程度に申し添えれば細かいものではあるが、築瀬一雄博士によると立教大学蔵遠島歌合に付載されるという頓阿五十首の奥書は、島原松平文庫本遠島歌合にも付いている。どうしてこれが遠島歌合に伴うようになったのかは、お教え頂きたく思うことの一つである。正和五年十二月十三日成宝院の本によつて写した旨の仮名の奥書を有する光明峯寺撰政治家歌合としては、他に東大図書館本がある。

雅有のものらしい奥書を有する無名抄としては、築瀬博士本の他、書院部松岡本がある。年中行事歌合の内、「昭和三十七年々々末新興古書展に出品された室町期の写本」（六三七七ページ）は、その後東大文学研究室の架蔵に帰した。それから一、二気付いた点を述べさせて頂けば、松田武夫博士古今集奥書にいう「此

字飛来……」は確かに解し難い所がある（四八・八九ページ）が、「此」は「道」の草体の誤写なのではないであらうか。東野州聞書には、為家が日吉社に参籠して千首を詠んだ際に、「道」という字を書いた紙片が直衣の袖に懸つたという奇蹟を語っている。為頭の「昔我が名をさへかけぬ三笠山いかなる藤の下葉なるらむ」を引いて、「少将になつた事もあつたのであろうか」といわれた（八四ページ）が、「かけぬ」は打消しであらうから、少将は経験していないと見るべきか。なお、夫木抄所載の為頭の作より、「花をみる道のほとりのふるぎつねかりのいるにや人まよふらん」「はかなしやつゝ井の蛙わればかりほかをもしらず浅きこゝろは」の二首を抜いて、「沈淪の極、晩年は飄逸の境に達したのか、或は世をすねての反抗であるのか」といわれた（八六ページ）。前者は白氏文集の古塚狐により（その先蹤は赤羽淑氏の指摘された如く、定家の十題百首に見える）、後者は莊子に原拠を有するものであるから、単に飄逸や反抗とのみ割り切れないもの、例えば殊更漢籍を詠み込んだというような意図を想像することもできるのではないであらうか。

嘗て家隆家集の諸本に関する小報告の内私が失考を冒した藤原資経の考証は本書で正されている（九四ページ）、寂恵の事蹟も本書によつて更に多くを加えることができたなど、著者には屢々公私にわたつてお教えを頂き、お世話になつている間柄なので、心安だてに勝手なことをも敢えて申し述べさせて頂いた。著者の『中世歌壇史の研究』は、室町後期の刊行によつて、三部作として完成されるという。その日の一日も早からんことを祈り、非礼をお詫びして、妄評の筆を措きたいと思う。（昭和四十年十二月・明治書院刊・A5判八九六頁 三八〇〇円）